二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 茶　瓶
挿絵 助三郎

第一章　闇夜に輝く　006
第二章　背信の徒　039
第三章　悶える人妻　082
第四章　魔王の淫謀　117
第五章　堕ちる封魔師　183

登場人物紹介

Characters

鳳凰寺／早川 可南恵

愛する夫と娘には隠しているものの、実は淫魔と戦う一族の女封魔師。戦いの際には、チャイナドレスに身を包み活躍する。

鳳凰寺 奈緒

可南恵の姪にあたる少女封魔師見習い。実戦経験は少ないが、非凡な才を持つ。

鳳凰寺 夏樹

可南恵の妹であり、奈緒の母親。夫の浩介とコンビを組み妖魔と戦う。

鳳凰寺 浩介

夏樹の夫でありパートナー。秘孔をついて淫魔と戦う拳士。

早川 和人

平凡ながらも妻と娘を愛する、可南恵の夫。

早川 栞

可南恵と和人の間に生まれた一人娘。

『第三章　悶える人妻』より

（一体…なにをしようとしているの……？）
「ハァ…っ！」
男の掛け声とともに、可南恵のチャイナドレスに覆われたスラッとした背中に熱いなにかが突き刺さる。そしてそれが突き刺された箇所から急激な熱が発生し、全身を駆け巡る。
「ンはァァァ……ッ！」
思わず女の叫びを上げてしまう可南恵であった。麗姫の呪いに冒されたときのような熱く切ない衝動が背中から、脳を通って足先、腰の奥にまでビィン、ビィンと伝わっていく感覚。腰が抜けそうになる。
「秘儀・花肉散乱。私が経絡に通じているのはご存知であると思いますが、経絡の中には女を発情させるような秘儀も含まれているのですよ。もちろん外法ですが…」
「こ…こんなぁ……こんなことって……」
可南恵は自分の身体の反応に戸惑っていた。一つに固まっていた身体が一点を突かれただけで開いてしまったような。先ほどまでは遥か遠かった快感の頂点が無理矢理その目前に突きつけられてしまった。
「それでは改めて味わわせていただきますよ。義姉さんの素晴らしい女肉をね……」
再び、浩介の手が乳房に伸びてきた。しかし今度の感覚は嫌悪だけではなかった。
「ん……んゥ……ッ」
微かな女の声を漏らしてしまう人妻封魔師。白いドレスの柄ごと熟れた乳房の両膨らみ

を好きなようにこね回されてしまう。適齢を過ぎたとは思えないほどの肌の張り、それもただ溌剌としているわけではない。人妻ならではの柔らかさとでも言うべきか、その成熟しきった美肉は服越しであるにもかかわらず敏感に愛撫に反応する。

そしてそれは双乳に限ったことではない。男の味をよく知った肉体はどこもかしこも敏感で、よく脂肪のついた熟れた肉体は男を求めているかのようであった。

「はァ…ンゥ……」

（あァァ……いけない…私…感じてしまっている……）

憎むべき淫魔によって悦楽を与えられているということに激しく嫌悪感を覚えるものの、それを受け入れてしまっている。夫以外の手で陵辱されているという状況がむしろ人妻のマゾ的な羞恥快感に火をつけているのである。

浩介の揉みしだく指が絹の布地越しに膨らみの頂点を探り出す。そこはすでにチャイナドレスの上からでもわかるほどにしこり、勃ち上がっていた。淫魔の義弟はその人妻の弱点をギュゥっと強く摘んで引っ張り上げた。

「ほぉぉぉんん……っ！」

口をつぐんでいたのに無様な喘ぎ声が漏れてしまう。

「いヤッ…やめなさい！　んんゥ……妻子のある身として…んぅ……こ、こんな…恥ずかしくないのですか…っ！」

我ながら的外れなことを言っているのは理解している。彼はすでに堕ちた者なのだ。説

得など通用するわけがない。しかし可南恵は身を焼く激感に少しでも手心が加えられるならと、必死であった。
「義姉さんこそ、ここをこんなに熱くして。和人さんの妻として、恥ずかしくないのですか？　私はあなたの妹の夫なんですよ」
（嫌ぁぁ……言わないで……っ！）
しかし逆に、一番触れられたくない部分に触れられ、それと同時に浩介の手が白いチャイナドレスのスリットを掻き分け、最も触れて欲しくない部分に侵入していた。
くちゅりっ…ぴちゃ…ぴちゃっ…。
「イヤぁぁ……ッ！」
自分の秘部が奏でる恥ずかしい淫音に、羞恥で身体が焼けそうになる。可南恵の色っぽいパンティはぐっしょりと濡れそぼって、その生地の色をより一層濃く塗り込めていた。浩介の指はショーツの上から力強く花肉をこね回す。そのたびにくちゃっくちょっといった聞くに堪えない粘音が薄暗い洞窟の中に響き渡る。
「ほぉぉぉお……っ！　…んんんん……っ！」
身体を焼き尽くす快感。パンティの底に貼りついた淫唇がその形を露わにしている。そしてそこを浩介の指でなぞられるたびに、ビクッビクッと拘束された身体が跳ねてしまう。時折皮から半分顔を出したクリトリスの形状を弾かれると、泣くような声を口の中に上げてしまう。

「だいぶ感じていらっしゃるようですね？　どうでしょう。義兄さんの指とどちらが気持ちいいですか？」
「だ、誰…っが……。か、感じてなど…いませ……んん…っ！」
義弟の顔で破廉恥な質問を投げかけてくる。
（こ…こんな……こんなに感じてしまうなんてぇ……）
可南恵とて人妻。女の快楽は十分に知っている。たとえ無理矢理であろうと、心が拒んでいようと身体が相手に屈してしまうことがあることは理解していた。それでも、今回の快感はいままで受けたものの中でも熾烈なものであった。
「いやぁ……もうやめなさい……んんんむぅぅ……」
浩介は快感に頭がとろけだした人妻の隙を狙って、激しく唇を重ねてきた。可南恵はイヤイヤをするが、頭に片手を回され、より深くディープなキスをされてしまう。
「んんん……っんむぅぅ……んっ……」
（和人さん以外の人に唇を許してしまった……）
舌を千切れるほど強く吸われ、全身がくなくなと弛緩する。心では拒んでいるのに、力の抜けた身体は言うことを聞かない。次第に敵の舌を受け入れていく人妻封魔師。
「ふぅん……っ……っん……」
（ああ……どうして……っ。上手ッ……ん……）
舌をぴちゃぴちゃと絡ませ合い、歯茎をなぞるように丹念に舐め回す。浩介のディープ

キスは実に巧妙であった。グッと強く逃げられないように押さえつけておきながら、しかしキス自体は実に繊細で、感じるスポットを巧みになぞってくる。
可南恵が特に感じるのは口内の天井部、ぬめぬめとした軟口蓋の部分である。敏感なそこの一帯をべろぉッと舐められると頭が白くなるような快感が脳に直接送り込まれる。そうして軟口蓋を散々に責め、うっとりさせたところで、緩んだ舌を強く吸われるのだからたまらない。人妻の秘壺から、膣粘膜へと愛液が徐々に染み出してきているのがわかった。
「んんんむぅ……っ！」
目の前がチカチカと光るような感覚。眩しいほどの飛翔感が目の前に迫ってくる。
（キスだけで……こんなに感じてしまうなんて……っ）
さらに浩介の腕が可南恵の身体を這い回り始めた。そして両手はチャイナドレスを押し上げる胸の突起と、もはや下着全体が変色してしまうほどに湿ったショーツの中に狙いを定めた。
「ぅうんんんんん……っ!!」
くっちょ…ぴちゃぷちゃ……ぐちゃ……。
舌を吸われている最中にパンティの中をまさぐられ、身を焦がさんばかりの疼きに襲われる人妻封魔師。激しい淫音を立てながら可南恵の媚肉を追い詰めていく浩介。そしてその指は皮から剥けかけたクリトリスを捉えた。

「んんはァァァァん……ッッ!!」
唇を塞がれた状態で敏感な突起をコリコリと責められ、浩介の口に喘ぎ声を放ってしまう。腰の奥のほうからじくじくと淫液が滲み出してくる。
「ほら……ココは素直に感じていると言っていますよ。こんなにコリコリになって…」
なおもグリグリと淫核を人差し指と親指で転がされると、あまりの快美感に可南恵は狂乱する。尖った乳首と一緒にひくつくクリトリスの皮を剥かれた。その瞬間、アクメの予感がビンビンと人妻の身体に浮かぶ。
(こんなぁ……淫魔に…イカされてしまうッ……憎き敵なのに……っ)
「クックック…イクんですか？　夫でない男の指に犯されて」
夫への不義を揶揄され、屈辱に身を焦がす人妻封魔師。義弟の顔をした邪悪で卑劣な淫魔に屈してしまう自分が悔しい。しかし昇り詰めていく肢体は自分の身体なのにどうやっても制御できない。もう一度股間の淫豆を指先でつぶされたとき、身体が浮かされるような感覚が全身を走り抜ける。
(イヤぁ……っっ！　あなた…許して……っ。わたし……っ……イクッ)
ぴとっ。
「え……!?」
思わず不満にも近い声を義弟の口の中に漏らしてしまう。可南恵の身体が絶頂の反応でビクっと反り返る寸前に浩介の指が秘芽から離れたのだ。刺激を求める肉芽がピクピクと

勝手に震えた。
「おや？　残念そうな顔ですね……そんなに絶頂（イキ）たかったんですか…？」
ニヤニヤと可南恵の反応を楽しむように淫液の糸を引いた指を遊ばせる。
（……ッ……私を…焦らして……楽しんでるのね……！）
激しい屈辱と怒り。それとともになんとしてもこの卑劣漢に屈してなるものか、という強い決意が頭をもたげてくる。
「イきたくなんて……ありません……私は…一人の男性に操を捧げた女です。あなたが言うような淫らな女ではありません……」
淫魔の男の目をキッチリと見つめ、そう宣言する。これは可南恵の意思表示だ。
「クックック……そうですか……ココはとても悦んでいるようなのですけどねぇ……」
くっちゅ…ぐっちゅ…ぴちゅっ……。
「ふぁぁんん……ッ」
秘唇を擦る指先に可南恵の身体がビクンと跳ねる。尖った秘芽を巻き込むようにしつこく前後運動を仕掛けてくる。敏感な淫豆が指先につぶされるとプツプツと泡のように快感が次々弾ける。粘液が敏感な表面に塗られ、そこを憎いほどの優しい愛撫でくすぐられた。
自分の敏感な身体が恨めしい。やりきれない切ないような気持ちが渦巻いていく。
（我慢するのよ……絶対に……）
「ふふふ……禁断の快楽に屈しまいとこらえる人妻。とてもいやらしい顔だ。たまらなく

なりますねぇ…。やはり義姉さんは天女のように美しい。そして淫婦のように淫らだ。是非とも私の奴隷にしたくなりましたよ……」
「…んんッ……あなたなんかより…和人さんの愛撫のほうが……何千倍も素敵…よ……」
余裕綽々に自分の戦果を誇る浩介の態度が悔しくて、苦し紛れの反論をする。
「クックック…夫以外の男性ではイカないというわけですか…いいでしょう。なら今度はごまかしようのないほどの快感を義姉さんに味わわせてあげますよ」
「くっ……」
浩介がパンツを下ろすと中から隆々と勃ち上がった肉棒が出現した。その逞しさに一種の陶酔を感じずにはいられない可南恵。チャイナに包まれた肢体を揺らしながらその感覚を否定する。しかし視線は男の肉棒に釘づけにされたままだった。
サイズは通常の男よりも遥かに大きく、亀頭の張りは深い。あの先端の傘でえぐられれば男の味を知っている女なら狂わずにはいられないだろう。
（いやァ…っっ……あんなモノで犯されたら私……っ）
自分が男の淫竿に貫かれるところを想像すると、キュンと子宮がひくつくのが感じられた。男の感触を求めて淫蜜が次から次へと分泌される。
「それは楽しみなことじゃな」
突如。部屋に響く女の声。
「……!!」

見れば、部屋の中心部に存在した巨大な糸の塊から人間サイズのなにかが生えてきていた。それは最初繭に包まれていたがややあってその頂点部がパカァと割れ、中身が現れる。
「ふふふ…久しぶりじゃの。妾は貴様に逢うのを楽しみにしていたぞ…」
「麗姫……っ！」
淫なる女王。蜘蛛の化身。糸の支配者。目の前に最も憎むべき存在がいる。過去に自分を穢し、淫らの輪廻に叩き込んだ張本人が。
「そのような形でまぐわってもよく見えぬわ。ほれ、体位を変えぬか」
未だ復活が不完全なのか自らの繭に裸の半身が刺さったままの麗姫は、くいくいと手をオーケストラの指揮者のように動かす。そうすると可南恵を拘束していた両腕と足の鎖がほどけ、脱力していた可南恵はそのままその場に崩れ落ちるようにしてうずくまる。
「義姉さんのような貞淑な女性を犬のような格好で犯す……とても興奮しますよ…」
しかしその身体を浩介が抱き起こそうとした瞬間、可南恵は白い閃光となって蜘蛛の女王に向かっていった。
「覚悟ぉっ!!」
拘束を逃れたことにより全身に聖気が漲っている。先ほどの快感により少し乱された気を纏め上げ、一歩さらに強く一歩と踏み出し憎き巨魁に向けて力を込めていく。
「来牙…!!　…はゥゥンン……っっ！」
しかし愛用の銀扇を手にする直前に、可南恵の身体に激しい女の疼きが襲いかかり、そ

の武器を床に落としてしまった。身体をギュウギュウと締めつける淫糸の仕業だ。
「無駄じゃ……お主の身体はすでに淫呪に蝕まれておるわ。もはや妾の思うがままに動く人形にすぎん」
（く……悔しい……手も足も出ないなんて……っ）
呪いをかけた魔王が近くにいれば、当然呪いの強度も強力なものとなる。僅かな聖気の発動も許さないとばかりに全身の糸が人妻封魔師を締め上げる。
「ハァァんんン……っっっ！」
可南恵の身体中に赤い糸が巻きついている。それはただ巻きつくだけでなく、人妻のウィークスポットを探り出し、ゆっくりと刺激するという悪辣なものだった。純白のチャイナ服の下でしこりきった乳首が糸にこよりを作るように締めつけられ、ビリビリと痺れる感じが沸き起こる。敏感になった背中をさすり、脇腹を絶妙の強さで刺激し、太腿から足の裏まで、微かにぬめった糸が舐めるように蹂躙する。
麗姫の指がパチンと鳴ると、可南恵の四肢は再び拘束される。しかし今度の体勢は牝犬のように地面に四つん這いにされる形であった。
「イヤぁ……っっ！　こんな格好……」
浩介が背後から豊潤な桃尻の薄皮を剥くかのように、ゆっくりとパンティを下げていくと、むっちりとした肉果が姿を現す。そしてその長い指を股間に差し入れた。
「ほら、義姉さんのオマ〇コがヒクヒクとして、外は美しい花弁のようなのに、少し中身

を剥けばまるで熟れた果実のようですよ……それに匂いが素晴らしい……まさに成熟した牝の芳香ですね…」

「イヤぁ……ッ！　言わないでぇ……ッ！」

魔義弟の下品な揶揄に焼かれるほどの羞恥を受ける可南恵。しかし確かに可南恵の秘部は膣奥から漏れ出した女蜜によってドロドロのスープ鍋のようになっていた。

絶頂寸前で止められた人妻の花弁は赤く腫れ上がり、ぐにゅぐにゅと左右の肉びらが蠢いてまるで熟しきった花肉のように淫猥であった。陰唇の合わせ目は充血し、上部にピンと先ほどいじめられたクリトリスが勃ち上がっていた。

その肉門の向こう側は桃色の熱い媚肉がぎゅうぎゅうに詰まっており、指を深く挿れるとぐいっと食い締めるような動きをする。淫欲を溜め込んだ人妻の膣粘膜は綺麗なピンク色であったが、その清潔さと肉の蠢きのギャップがなんとも淫猥であった。

膣壁を指が擦り上げると悦ぶように濃厚な淫蜜がじくじくと湧き出てくる。その柔壺が愛汁を吐き出す様もまた淫らで、浩介の興奮を誘った。

「あぁ……イヤぁ……っ……んん……」

淫魔の辱めの台詞が可南恵のマゾ的な快感を引き出しているのも事実だった。

「もうたまりませんよ……いただかせてもらいますよ……義姉さんの肉体を……」

チャイナの裾をめくると、大人の女性の色気に溢れる白い太腿と、やや紅潮してむっちりとしたヒップが淫魔の目に晒される。そして露わになる決壊しきった肉壺に浩介はペロ

リとらしくない下品な仕草で舌なめずりする。
「クックック…このときをどれだけ待ち望んだことか…たっぷりと楽しませてあげますよ」
大きく弾む桃尻を抱え上げ、淫棒の位置を合わせる。可南恵の乱れたヴァギナはペニスを受け入れやすいようにぱっくりと開いて、まさに爆ぜた生肉の花であった。
（あぁ……挿入れられてしまう……夫ではない男性のモノを……ッ）
「いきますよ……！」
ズボォォォォ。
「ほォォォォんンンン……ッッッッ!!」
ぐぐぐっと肉棒が膣内に埋まる感覚。その懐かしい感じに可南恵は囚われる。
（硬い……ッ……それになんて熱いの……っ）
「何年ぶりですか？　男の肉は…」
「ぅんん…っ！　し、知りませんっ…！」
そうは言っても和人との最後にしたセックスはいつだっただろう。夫のモノではない肉棒を膣内に受け入れてしまったという背徳感はこの人妻を大きく打ちのめした。
「ご主人も忙しくて、義姉さんも欲求不満だったでしょう……私が心ゆくまでイカせてあげますよ……」
可南恵の心の内を読むかのように浩介の言葉が責め立ててくる。ドスドスと乱暴な突き込み。しかしそれはすべて快楽によって塗り込められ、人妻を官能の渦に巻き込んでいく。

「そんな……こと…っ。私は欲求不満なんかじゃ……アぁぁぁんっっ！」
肉棒がさらに深く突き挿さり、可南恵は淫らな声を漏らしてしまう。
浩介の陵辱は夫の和人の優しいセックスとはまさに正反対であった。浩介のストロークは和人にはない力強さと、無理矢理に可南恵の性を暴き出すかのような乱暴さがあった。そんな狂暴な快楽は、人妻の疼く身体を一層燃え上がらせる。夫とのセックスでは得たことのない深く、重い快感に可南恵は乱れた。
膣壁を自慢の亀頭でゴリゴリと慣らしたあとで、満遍なく膣に溜まった淫蜜を掻き出すように、グンっと引っ張り出すのだ。それだけの動きで全身をひくつかせてしまう人妻封魔師であった。
「あぁん……っ。ふあァァン……ッ。あああぁぁあ……っっっ！」
「可南恵よ。お主の聖気が妾に流れ込んでくるぞ……。しかし、なんとも浅ましいことよな。夫がある身でありながらこうも男の肉に乱れ狂うとはの……」
（あぁあぁぁ……ッ和人さん……っ。許してぇ……ッ）
なんとか感じまいと心を整えようとするのだが、ぐじゅぐじゅと濡れた粘膜をこそぎ取られる感覚に身体が支配されてしまい、どうすることもできない。腰を打ちつけられるたびにぐっちゅぐっちゅと耳を塞ぎたくなるような濡れ音が響き、その羞恥に隠れた快感を感じざるを得ないのだった。
グイグイとねじ込まれる肉の棒の先にある子宮の奥から淫らな愛液を垂れ流しながら、

キュンキュンと膣肉を締めつけ、義弟のペニスを味わってしまう。封魔師の心が快楽に流されるたびに身体の中の聖気が乱れ、抵抗する気持ちが失われていく。このまま身体がこの快感に支配され絶頂を迎えてしまえば、自分の体内の聖気を大きく奪われてしまう。

（ああ…いけない……これ以上……感じてはいけないのに……ッ）

封魔師として淫魔に聖気を奪われるというこらえ難い屈辱。可南恵は胸元がはだけたチャイナ服を振り乱すように上体を振って抵抗する。しかしろくに身動きが取れずに押さえ込まれてしまう。そしてその行動を罰するかのような激しい抽挿。そんな辱めに女の肉体は快楽に逆らえずに燃え盛ってしまうのだ。

「ほらっ！　ほらっ！　どうですか？　義兄さんと比べて私のモノは？」

「そ……そんなこと…っ…言えません……ッッッ！」

いままで体験したことのない深い悦楽に可南恵はそうとしか言えない。夫のペニスは特筆するべきところがないモノであった。それでも愛し合い結ばれる二人の間には究極の快感がある。そう信じていたのに、

（こんな……和人さんのより……ッ……）

考えまいとしても、浩介から与えられる黒く深い快感はそれを根底から覆すのに十分な威力を持っていた。そう、可南恵は和人との性行為では本当の絶頂を感じたことはなかったのだ。精神的に満たされ、エクスタシーを感じることはあっても身体の芯からとろけるほどの絶頂を味わったことがない。

（それを……夫ではない男性から……与えられるなんてぇ……ッッ）
あってはならないことだ。許されざる行為だ。そうわかっているのに、可南恵の身体の奥の部分がその禁断のアクメに期待するようにビクビクと震えてしまうのだった。
「身体は正直なものよな。こんなに感じてしまっておるではないか…」
肉棒が刺さっている部分に糸を這わせるとぴちゃぴちゃという淫音とともに花蜜が弾ける。すでに可南恵の身体は屈する寸前であった。身体の真奥から封魔師としての重要な力が抜け落ちようとしている感覚。
日常生活に隠してきた自分の牝としての本能を暴き立てられ、人の妻という最も業の深い性と向かい合わされる。その背徳感がたまらず可南恵の心の線を揺さぶるのだ。
（こうなった……っら……なるべく声を出さないように……しないと……）
自分が感じてしまったり、絶頂を迎えてしまうことを相手に悟られてはならない。
（声……っ…さえ…出さなかったら……我慢すれば……ッッ）
「んんん……っっ。んふぅ……っ」
「ふふ……我慢しておるようじゃの……」
微かに声が外に漏れてしまうが、かろうじて抑えきれる。自分を焼き尽くそうとしている悦感の嵐は大きなものだが、こらえることはできるのだ。そう可南恵は信じていた。
「おや？　どうしたのですか？　気持ちよくないのですか。なら……」
可南恵が声を我慢していることを察した浩介はわざとらしくストロークの幅を大きく取

り、一気に可南恵のむっちりとしたヒップに腰を叩きつけてきた。
ズゥゥゥゥゥン。
(ほおぉぉオォ……ッッッ……深いィィィ……っ!)
一気に子宮口まで亀頭を届かせてくる。そして灼熱の先端をズンズンッと子宮に何度も叩き込まれると、人妻の爛れた秘粘膜はギュンギュンと収縮し、ますます浩介の肉棒を愛しげに締めつけてしまうのであった。
「んんあぁぁ……っっ!! ……ふむんんんん……っっッッ!」
強く男を締めつけてしまえば、粘膜同士の密着度は上がりますます強く柔襞を擦り上げられる結果となってしまう。くぐもった喘ぎを微かに上げながら、可南恵は必死にその感覚をこらえていた。
しかし淫蜜を吸い膨らみ収縮する膣粘膜を入り口まで残らず引き上げられ、ズゥンと膣奥にまで亀頭を叩き込まれる快美感は可南恵の思考を狂わせるのに十分な威力を持っていた。たっぷりと余裕のあるピストンで子宮の奥にまで揺さぶりをかけられる。
「ふぅン……っ。んんんぅゥ……っっっ」
「クックック…どうしたんですか義姉さん? ずいぶんと感じていらっしゃるようですね…こんなに私のペニスを締めつけて…。義姉さんのヒダヒダが私のペニスに吸いついて離れませんよ……義姉さんは人妻だというのにとてもスケベな方ですね」
淫魔の本性を剥き出しにした浩介が恥ずべき言葉で自分の義姉を辱める。可南恵の身体

と浩介の肉の相性は抜群であった。可南恵の蜜壺は、膣内は柔らかくうねり、一旦亀頭に吸いつくとくわえ込んで放さない。それでいて締めつけが強く部分的にザラザラとしていて亀頭を実に細かく刺激してくる。実に名器と呼べる代物なのである。

そして浩介の肉棒は可南恵の膣の形をそのままかたどったかのようにフィットし、粘膜の隅々までをこそぎ取り、そのザラザラした敏感な箇所を残らず刺激する。

さらにひくつく子宮口が浩介の亀頭に突かれやすい形で待っている。そこを最奥まで届く長いストロークで狂わせる。

「うぅむ……たまりませんよ…義姉さんの膣内……中はこんなにぐちょぐちょと爛れているのに、中は吸いつくようにギュゥギュゥと締めつけてくるんです。こんなに私のモノを愛しく愛撫してくれるなんて感激ですね」

「可南恵は淫乱だからのぉ…。これほど淫らな封魔師、他にはおるまいて……」

立て続けにそう言われて、自分が女の中でも特に淫乱なのだと思い込んでしまう。

（こんな…されたら……っ私……我慢できない……っ）

ズンズンズン……ッ！

「どうですか？　こうやって子宮をえぐられるのは…。感じすぎて狂いそうでしょう」

深々奥まで貫かれた状態でグリグリと子宮口をえぐられたとき、お腹の奥からくるたまらなく深い快楽に淫らなヨガリ声を漏らしてしまう。

「あぁぁオオオオ……っっ!!　んんあぁぁぁぁ……っ！」

「クックック……やっと素直な声が出てきましたね。さあじっくりと感じてください」
そしてコリコリとした子宮の弾力を楽しむようにそこから小刻みな前後運動を開始する。ズンズンと突き込まれるたびにジーンという奥の奥からの疼きが可南恵の肢体を埋め尽くそうとしてくる。子宮に直接響かせてくるストロークに口は開いたまま。
（あぁ……嫌……ッ……イクの……だけは……っ）
「おお、可南恵はイキたがっておるようじゃぞ……ほれこの淫乱な女に獣のような声を上げさせてイカせてやるのじゃ……」
「クックック……言われなくてもそうするつもりですよ……義姉さんにはたっぷりと女恥をかいてもらいます。私のモノで義兄さんのことなんて忘れさせてあげますよ……」
スボッ！　じゅぶっ！　ズブリッ！
浩介のピストンがさらに加速する。腰がさらに激しくヒップに打ち込まれ可南恵はそれに合わせるように露骨な喘ぎ声を上げてしまう。
「あん……っ。うぅ……っッ！　んん……っ。あはぁぁァァンン……ッ」
絶頂はもはや逃れられない目前に迫っていたが、その瞬間を一秒でも先延ばしにしようと必死に精神を保とうとする。何度もむっちりした尻を振りたくりながら成熟してムンムンとした牝の芳香を撒き散らす人妻封魔師。
しかしもはや身体は限界であった。可南恵の全身は真っ赤に紅潮し、背筋は屈辱の瞬間を待ち望むかのようにガクガクと震え、激しい運動に人妻のチャイナドレスは胸元が大き

くはだけそのたっぷりとした乳房が見え隠れし、スカートもまた腰の辺りまで捲り上がり、むっちりとした巨尻が快感に震えている様を明らかにしている。

身体を覆い尽くす官能はすでに止まれないところまできていた。相手が自分の妹の夫であり、決して許されない交合であること。自分が和人という良人（おっと）を持った妻であること。その二重の背徳感が可南恵を狂わせていたのだ。

「もう限界ですか？　ほぅら、気をやるときは『イク』というのですよ」

「誰が……っそんな淫らな言葉……を……ッうム……ッッ！」

牝犬のような格好で後ろから犯され、屈辱のままにアクメを迎えようとしている人妻封魔師。せめてもの抵抗と、絶頂の瞬間を相手に悟られないようにする。

「ほら義兄さんに報告するんですよっ……恥ずかしい可南恵は夫以外の肉をくわえ込んで絶頂を迎えてしまいますってね……」

（そんな……恥ずかしいこと……っ）

目の前に和人がいて、自分の不貞をすべて見られているような感覚に襲われ、ビリビリする背徳感が可南恵の全身を痺れさせる。

「トドメです。さぁ、イきなさい…そらっ！」

ズボォォォォォォ!!

グゥンと反り返った先端が一際強く人妻の子宮奥をねっとりとえぐり、膣奥から爆発的な官能がせり上がってくる。次々と襲ってくる津波のような肉の悦びに身体がこらえきれ

ない。秘粘膜が肉棒に絡みつきギュゥゥと締めつけた。可南恵はガクンと反り返った。
（駄目ぇぇ……ッッッッ……言っては駄目……っ）
「んむゥゥ……っっっっっ!!」
ギュンギュンと収縮する子宮に支配され、絶頂の「あの言葉を」叫びそうになる。
すんでのところでこらえたと思った。確かに絶頂を味わってしまい、未だに身体の痙攣は止まらないがあの言葉を言うことだけは避けられたのだ。しかし、
「膣内で出しますよ……っ」
「えっ……いやっ！　やめ……」
ビュルルルルルッルルルルッッッッ!!
突然の射精。妊娠の恐怖に可南恵が激しい拒絶をする前に、それは力強く圧倒的な支配力でもって可南恵を隷属せしめた。灼熱の液体は可南恵の子宮を焼き尽くし、膣内射精の激感はあっという間に人妻の身体を昇り詰めさせてしまった。
「あぁぁぁぁァァァァァァ……ッッッッッッ!!」
もう我慢できなかった。それをされてイカない女はいないというのに。まして男の味を知った人妻が子宮に熱い精液を浴びてアクメを迎えないわけはないのだ。
（あなた…許して…私……イきます……ッ！）
夫への告白が身を焼く快感に拍車をかける。
「……ッッッッッ！　……イクっ……」

ガクガクガクガクッ！
身体全体がビクンっと反り返り、全身に鳥肌が立つ。がくがくと身体が震える。目の前がチカチカと白く光り、視界が弾ける。
「だめェ……っ！　い、いく……っ。イクゥゥゥ……ッッッッッ!!」
グゥンと身体を躍らせながらめくるめく絶頂の言葉を叫ぶ人妻封魔師。まさに女の咆哮であった。身体を硬直させ、白いチャイナを振り乱しながら「イク」と叫び続ける可南恵。
最後にがくっと力が抜け、四つん這いのまま肢体を弛緩させた。ぐぅぅっと身体の底から聖気が奪われる感覚。可南恵の抵抗する気持ちが萎えていく。
「クックック…これからですよ、義姉さん。もっともっと深い女の悦びを味わってもらいますからね……」
射精が終わってもまったく変わらぬ硬さを誇る浩介の肉棒が絶頂の余韻冷めやらぬ可南恵の熟肉を、いよいよという感じに攻略しにかかったのだ。
「いくっ……！」
「いくゥゥッッ……!!」
「イキます……っ！」
一回アクメを迎えるともはや歯止めは利かなかった。グサグサと男のペニスを挿し込まれ、幾度となく絶頂を迎える人妻。何度も、何度も可南恵は絶頂を迎えさせられた。そのたび自分の中から抜け落ちていく力が可南恵の心を砕いていった。

『第四章　魔王の淫謀』より

（出さないぃ……ッ……イかない……ッ……イかないぃぃ……ッ）

リボンを振り乱し、顔を紅潮させる我慢の表情で頭の中で必死に唱える。封魔師以前に人間としての尊厳を著しく破壊する現実を否定するように。

ズボボォォ！

ぐちゃぐちゃに穢された菊穴から一際太い亀頭が抜かれた。愛しい肉の形を覚えるように、少女封魔師のアヌスは無残にも広がってしまっていた。巨大な楔を引き抜かれ、ギュルギュルと恐怖の魔薬が腸内を激しく波打ち、背筋のおぞましい愉悦が、痺れるような快感が、奈緒の頭を麻痺させる。

（イきたくないイきたくないイかない…イかない……イかないぃ……イク……ッ）

びゅぶぶるるるるるるるるッ!!

激しい破裂音を立てながら放出される魔薬。魂まで抜き取られるような快楽。背筋がゾクゾクっと悪寒立ち、子宮を伝い、腸粘膜の中で破裂する。限界まで圧迫された直腸がぎゅるぎゅるとうねり、全身のあちこちから汗が噴き出し、びくびくと震える。そして究極の解放感。奈緒の頭の中がスパークし意識を白く白く染め上げていく。

「イクッ――――――――!!」

ぶばりゅりゅりゅりゅりゅッ!!

絶頂。排泄という人間として最も見られたくない姿を晒しての絶頂。しかしその解放感による絶対的な快感。桃色に染まった尻を極限まで高く突き出し、大量に汚液を吐き出し

ながら奈緒はアクメを叫び続けた。
（出てるぅぅぅぅ……ッ！　いっぱいでちゃってるぅぅぅぅ……!!）
「イク…ッ！　…イくぅ……ッ…イクイクッ……イクっ！」
アクメを告げる言葉を発するたびに背中が反り返る。中身のほぼ空になったアナルをひくつかせながら肛門絶頂に達し続ける少女封魔師。
ヒクヒクッ……ぴゅる…ッ。
（あぁ……聖気を奪われてる……っ…？）
自分の体内から大切な力が奪われていく、初めて感じる絶望的な喪失感も奈緒の屈服を加速していた。すべてを放出しきったあとも甘く痺れる絶頂感は続き、少女封魔師はそのたびに可愛い声で、
「イクッ」
と叫び、頭のリボンがほどけるほどに二つのしっぽを振り乱した。
（イク…ッ…のが…止まらないよぉ……また…っ……イク……ッ）
頭の中でも何度もアクメに放り込まれ、全身を痙攣させる。バルバスの水から解放されたというのに聖気を大量に奪われた奈緒は疲弊しきって、指一本動かせなかった。
「どうかな？　身体の奥底から溶かされるほどの快楽は？　たいしたイキっぷりだったようだが。フォッフォッフォ…」
悲劇に染まる奈緒は蝦蟇王の声も意識の遠くで聞いていた。

（こんな……私……こんなヤツの前で…お漏らししながらイっちゃって……聖気もたくさんとられちゃって……もうだめ……私……生きていけない……）

その場で大声で泣き出したいほどの恥辱。いますぐにここで死にたいほどの絶望感に身体を震わせる。

「ぐふふっ……そろそろ仕上げといくか。母親と同様、貴様も儂の奴隷にしてやるわ」

得意げに醜い笑顔を向ける蝦蟇。倒れた奈緒に近づく。

（ああ……私…呪い、かけられて……堕ちちゃうんだ……もうだめなんだ……）

「多少急がんとイカン。蜘蛛を待たせておることだしの。可南恵とかいう封魔師も今頃同じ目に遭っておるだろうなぁ」

（……可南恵さん……!?）

心まで屈しようとしていた奈緒の奥底に、一筋の光が宿る。

（可南恵さんが同じ目に……）

思い出す。自分の愚かな行動が可南恵を死地に追いやってしまったこと。そしてその彼女はいま、

（可南恵さんも、こんな汚辱を受けているんだ……っっ！）

微かな闘志。自分のせいで、このようなこらえ難き陵辱を可南恵が受けているという事実。思い起こせば、夏樹だって、この目の前の蝦蟇蛙に許し難い行為を受け、呪いをかけられてしまったのだ。

（なにをやってるの奈緒！　自分だけが苦しんでるんじゃない……っ！　私は……私は）
「可南恵さんを……助けにきたんだ……っ！」
ゆらゆらと立ち上がる少女封魔師。チャイナ服の鎧は所々破け、聖気ももはや欠片ほどしか残っていない。足元もふらつくし、意識も朦朧として、とても戦える状態とはいえない。しかしそれでも、それでも立たなければならなかった。
（私は……私の心だけは……絶対に最後まで屈しない……っ！　可南恵さんのためにも…絶対に、絶対に生きて帰る…っ！）
「ほぅ。まだ堕ちておらんかったとは。まあそれも長くは続かんだろう」
シュルシュル。
バルバスが手を振ると、水流が再び奈緒を拘束した。今度は立ったまま正面から、足首と、腕を動かないようにされ、さらに足を大きく持ち上げられ、開脚を迫られた。身体を上から吊るされ自ら差し出す「駅弁」のような体位になる。
バルバスの太い指がチャイナスカートからこぼれる火照った太腿をいやらしくさすり、さらに露わにしたままの肉棒を近づける。
「……」
「ん？　どうした。だんまりか？　小娘の大事にしていた純潔が儂のモノで破られようとしているのだぞ？」
（声だけ……は…出さない）

先ほどの心までとろかせるような快楽に身体がこらえることはできないだろう。現にいまも、先ほどの肛虐の余韻で全身が火照ったままだ。子宮は毎秒ビクッビクっと震えて、甘い痺れを背筋に伝えてくるし、菊門はあの恥ずべき放出のときに広がって、ヒクついたまま戻らない。冷たい空気が尻粘膜に入るたびに、ジーンとした愉悦が身体をビクンとさせてしまう。それでも、最後まで抗いたかった、たとえ無駄でも、結果的に淫に貶められてしまったとしても、自分の力の限りは戦いたかった。

（イきさえしなければ……イク…ときの声さえ……我慢すれば……）

アクメを迎えるときのあの背筋が凍るほどの快楽。あの瞬間さえ迎えなければ、声さえ漏らさなければ。自分を保っていられる。聖気を自分の中に込めていれば反撃のチャンスだって必ずある。自分の心は決して侵されることはない。

「ふん面白い。ならばどこまで我慢ができるか試してやろうではないか」

ズズズズズブ。

「ひ……ッ」

ゆっくりと肉棒を秘裂に埋め込んでくる。あくまでゆっくりと。快楽に溶かされた肉壺はぱっくりと口を開き、太い肉棒を歓迎する。

「やはり若いオマ〇コはいい。ぷりぷりした肉が弾ける感触がまたたまらん」

「んぁ……あぁ……んッ」

入り口を通り抜ける熱い肉の塊。疼く膣壁を擦られる感覚。苦しみや痛みのない純粋な

快楽の甘やかさに一瞬心を奪われそうになるが、すぐに気を取り直しキュッと口を閉める。
「ほれ。ここが処女膜じゃ」
「あ…んふぅ……ッ」
熱い先端が奈緒の純潔の壁をツンツンと突く。鋭い痛み。
（穢される……私の処女…こんなヤツに奪われちゃうんだ……っ）
悲劇の瞬間に備え目を閉じ歯を食いしばるチャイナ少女。しかし肉竿はすぐにその場所から入り口まで引き返してしまった。
「え……？」
「どうした。一思いに貫いて欲しかったのか？　ぐっふっふ……」
不気味に笑う蝦蟇王に不安を隠せない。
「貴様は特別に母親と同じ快楽を味わわせてやろうと思ってな」
ゆっくりと焦らすように入り口にペニスを遊ばせる。
「貴様の処女を破ったあと、儂の精液を子宮に注ぎ込み気をやらせ、そこで呪いをかける。破瓜と膣内射精とアクメ。この三つを一度に味わえば貴様の魂を聖気ごとごっそり奪えるという寸法じゃ」
（そ……そんな……っ）
女性に一度しかない処女喪失と、妊娠の恐怖がつきまとう膣内射精。そして絶頂。それを一気に受ける感覚というものはいかなる衝撃なのだろうか。果たして自分の母はその衝

撃をこらえることができたのだろうか……。
「フォッフォッフォ……小娘の子袋が期待しておるわ」
汚辱の計画を予告され、恐怖とともに、それを求めるような微かな期待感が膣奥を震わせ、愛蜜の分泌を活発にする。
ズン…ッズン…ッズンッ…。
入り口付近までとはいえ、とろけた膣内を掻き回される快感はたまらなかった。ぐちゃぐちゃになった粘膜が勝手に肉竿にまとわりつき、柔らかく締めつける。
そしてそのまとわりついた肉を一枚一枚こそぎ落とすように、亀頭が掻き回してくる。熱く腫れたようになっている膣粘膜は、それだけで悦びを生み出し、膣奥からどろりとした淫蜜を吐き出すのであった。
「んんぁ……ぁぁん……ん…」
思わず可愛い喘ぎ声が口を割る。
「んん…？　いまずいぶんといい声が聞こえたようだなぁ？」
揶揄され、再びキッチリと口を閉じ、目の前の蝦蟇を睨みつける少女封魔師。
子宮が疼く。バルバスの舌は緩やかな動きながらも、膣奥側の薄壁を挟むようにくちゅくちゅと刺激を与えてくる。それに合わせるようにゆっくりとした動きからやや乱暴な腰遣いを始めるバルバス。
（先っぽが……つんつん…きてる……ッ）

処女膜のところにまで熱い亀頭が押し寄せ、先ほど味わったアヌスでの激しい行為を思い出してしまう。びじゃッと水が弾ける音がして、子宮が女汁を噴き出す。それと同時にへその裏が熱く、ひくひくと痙攣し、奈緒の意識を離れて蠢きだす。身体が熱く火照り、吐息が荒くなる。声を我慢しようと必死に目をつむるが、甘いよがり声が少しずつ漏れていってしまう。腰がなにかを求めるように動いてしまう。

「んんんぁ……っ……んんん……」

ググゥ…ッ。

(あぁ……ッ……私の膣内……ッ……子宮……ッ)

膣奥が開き、肉の刺激を求めて子宮がググゥっと降りてくる。精を求めるように子宮口がパクパクと牝の反応をし、処女膜のすぐ裏にまでその熱が伝わる。

「ぐふふ……そろそろ儂も我慢できんわい。それではいくぞぉ」

(あ……ッ……くる……ッ)

一旦大きく腰を引き、それから一気に腰をぶつけてくる。

ズボォォォォォォ!!

「ぁぁん――――ッッッッ!!」

始めに感じたのは微かな痛み。しかしすぐ次の瞬間に腰奥を大きく揺らされる衝撃。下がりきっていた子宮を押し戻され、心臓がドクンと跳ねる。

(――――イ…ッ……イ……ゥ……ッ……ッ)

「はぁ……ッ……は……ぁ……ッ」
アクメに達する寸前。あとほんのちょっとでも突き上げられれば屈辱の瞬間を迎えてしまっていただろう。絶頂に達するギリギリのところで我慢したものの、身体に蓄積された悦感は一層切ないものとなった。
「ぐふふ…なんとか我慢したようだな…いつまでその我慢、持つかな？」
（こんなぁ……ッ……深いよぉ……ッ）
ズンッ…ズンッ…ズンッ…。
処女を失った絶望感に浸る暇もなく、激しく貫いてくる肉の存在感がはっきりと少女の膣内に感じられる。子宮をいきなり痺れさせられ最初の一撃でグズグズにされてしまった。追い討ちをかけるように膣奥に熱い亀頭を嵌め込んでくる。
「ああん……ッ……んふぅ……んんん……ッ」
よがり声を我慢できなくなってきている。口を引き締めようとしても、肺が激しい呼吸を求めて、勝手に口開いてしまう。口が開けば漏れてくるのは快楽を伝えるための甘い声である。自分の浅ましいまでの反応に羞恥心が込み上げてくる。
「どうだ？　儂のものは。気持ちがいいだろう…生娘などすぐに虜にしてやるわ」
ズブズブズブッ……。
気持ちよくなんかない。そう言いたいのに、おぞましくて仕方がないはずの蝦蟇のペニスを膣で甘く締めつけ、竿の部分に媚粘膜をまとわりつかせてしまう。蜜液にまみれた膣

粘膜はドロドロのスープ鍋のように熱くなっており、肉棒が通り過ぎるたびにぐっちょぐっちょと聞くに堪えない粘音が洞窟内に響く。
「ほぅほぅ…絡みついてくるわい。そんなに儂のモノが気持ちいいかぁ？」
（あぁ……ッ……おく……突かれてる……ッ）
そして執拗なまでの子宮へのストローク。散々に奥を突きまくって少女の頭を痺れさせたあとで、一気に引き抜き膣壁を悪辣にこそぎ取る。そうしながら先ほど散々に狂わされた腸壁を薄壁越しに圧迫してくるのだ。
「んはぁぁ……はぁあん…ッ……んッ」
腰全体がとろけるような切ない愉悦に翻弄される少女封魔師。もはや自分の意志では身体を動かせない。うねる膣壁は一層の刺激を求めて肉竿を甘く締めつけ、膣奥はさらに強烈に亀頭を歓迎してしまう。亀頭は締めつけに悦ぶようにより一層の熱さをもって子宮を突いてくるのだ。少女の顔にこらえられない快楽の色が浮かぶ。
ボコボコボコ……ッ。
（あぁ…ッ…また……玉が……ッ）
肉棒に浮かび上がる大きな宝玉。チャイナ少女を淫の呪いに貶めるための、邪悪な存在であるはずなのに、いまはより大きな快楽を自分に与えてくれる、待ち遠しい存在として甘い期待を抱いてしまうのだ。
ぐっちゅッ…ぐっちゅッ…ぐっちゅッ…。

「あん……あん…ッ…あぁ……んッ」

あまりの衝撃に力が抜け、バルバスのされるがままになっていた。腰の奥が溶けるような快美感が湧き上がり、声を我慢することが辛くなってくる。閉じ合わされた唇がほつれ、押し殺した喘ぎが高まってくる。細い眉を折り曲げて、時折、イヤイヤッと双方に分けた髪を乱し抵抗する。

バルバスはラストスパートとばかりに、ムチッと張り詰めた太腿を抱え込み、連続的に腰を打ち込んだ。ぐちょぐちょという粘膜が絡み合う淫靡な粘着音とともに、バスッ、バスッという打ちつけの音が響く。

バルバスが奈緒の腰を抱え豪快に打ちつけてくるたびにズンズンと突き上がってくるような悦感が身体を支配し、腰が勝手に動く。身体が徐々に反り返り、屈辱の瞬間が目の前に迫っていた。

（うぅ……絶対に…イくものか…イくもんか…ッ……ッ）

顔を真っ赤にし唇を血が出るほどに強く噛み、痙攣する身体を律そうとする。

バルバスの腰の動きが切迫してきた。奈緒の狭い膣内が肉竿に必死に食らいつく感覚がたまらない。淫液にまみれた粘膜がぴったりと貼りつき、くちゃくちゃとペニスを咀嚼してくる。さらに亀頭の先に感じるコリコリとした子宮口が吸いつくように亀頭を刺激すると肉棒全体が痺れるような快感に襲われ、根元から奔流が噴き上がってくる。

「ぐぉ…そろそろ儂も限界じゃ…生きておることを後悔するほどの絶頂をくれてやる…」

突然ボコンっとバルバスのペニスが膨らみ、どくんどくんと気味の悪い律動を始めた。それと同時に敏感なアナル側の膣壁がゴリゴリと擦り上げられ、子宮に重く深い一撃が叩き込まれる。抱えられた足が勝手にバルバスの腰に絡む。

ズゥゥゥゥンッ！

「うン……うぅぅ……ッんんんん……ッッッッッ!!」

切羽詰まった喘ぎを漏らし、蛙男の腰に巻きつけた両脚が強く腰を引きつける。

（イク……ッ）

腰の奥がどろどろに溶け、ビクビクと身体を震わせる。

「んんんんんん――――――！」

それでも絶頂の声だけは出すまいと切ない呻きを上げながらも必死で耐え忍ぶ。

ビュルルルルルルルルル。

「んあぁぁぁ――――――――――――――――」

しかしそんな瑣末な考えも、とろけきった子宮に浴びせられる灼熱の魔薬の前にはすべて吹き飛んでしまった。圧倒的な灼熱感が、たまらない快楽を伴って全身を焼き尽くす。意識は白く光るモノに乗っ取られ、口が勝手に悦びの声を上げる。憎き男にしがみつくようにして激しく全身を痙攣させる。

「イクッ」

それだけは我慢しようと心に決めていた言葉。しかし我慢できるはずもなかった。頭の

中までが粘液に漬かってしまったかのように、脳も身体も言うことを聞かない。ビュルッビュルッと膣奥に熱い液体を射精されるたびに身体がくの字に曲がる。身体が反り返る。ビクッビクッと痙攣しながらバルバスの上で踊るように快感に悶える。

まるで射精の快感に全身が支配されてしまったかのように。全身が浮かされる。先ほどの媚薬の膣内発射など比べものにならないほどの衝撃。そして身体に溜まるこの愉悦。このたまらないほどの激しい火照りが全身から外に出たくて。その切なすぎる甘疼がアクメを告げる言葉を吐き出させるのだ。

「イク…ッ…イク…ン…ッ…イく……ッ！　いく……ッ……いくぅ……ッ！」

なおも子宮を翔ばせる精液の奔流が、少女封魔師の絶頂をさらに高みへと昇らせていく。絶頂の上の絶頂。絶頂の上のアクメ。さらにそのアクメの上のアクメ。我慢しようと思っていたはずなのに、望まぬアクメであったはずなのに、この圧倒的なエクスタシーの前にすべて流されてしまった。聖なる力がごっそりと抜き取られ、張っていた身体がガクンと跳ねる。憎き蛙男に抱きつくように淫らなダンスを踊り続けるその姿に普段の彼女の毅然さはなかった。

「……イくぅぅぅぅぅぅ――――――――ッ!!」

魔の膣内射精の快楽を教え込まされた奈緒は、終わりのない絶頂地獄に叩き込まれ、意識は遠い世界へと飛ばされていった。

『第五章　堕ちる封魔師』より

「ほれ、どうしたのじゃ？　娘を助けるためなのじゃ。仕方なかろう、おぬしが男にむしゃぶりつくのも仕様のないことなのじゃ……」

甘言。頭の隅で理解はしていた。それでも。

（そう……そうよ……栞のため……だから仕方が……ないのよ……）

自分には理由がある。仕方がない。自分自身への言い訳ができるという甘い罠。淫に惑わされた人妻は明らかに正常な思考能力を失っていた。

「ほれ、欲しいのであろう？　男の肉が……。自分から求めるのじゃ」

（そう……栞のために……栞のために……おちんぽ……）

自分があの肉を口に含んでいるところを想像するとこの上ない幸福感が身を包む。瞳が期待に潤み、完全に心を奪われていた。麗姫の口元がニヤリと醜く歪み、仕掛けの成功を密かに喜ぶ。

「くくくっ……ほれ、娘のためじゃろうが。愛する夫の前で自らの不義を詫びるのじゃ。そして、自らの言葉で男の肉をねだってみせい……」

麗姫の言葉に一層強い罪悪感が湧いてくる。それでも肉の快楽を教えられ、深い恍惚を与えてくれ、精液の味を教え込まされ、自分を心の底から泣かせてくれる愛しい肉棒に少なからず心を奪われている自分が恥ずかしい。

「ごめんなさい……あなた……私は…私は……。愛する夫がいる身でありながら……不貞を働くこの淫らな女に……あなた方のおちんぽを……おしゃぶりさせてください……

ッ」

娘のためだった。それは間違いはない。しかしその奥底にこの肉欲に溺れたいという気持ちがあったことは否定できなかった。可南恵の口内はその台詞を言い終わるや否や唾液で溢れ、身体は熱くとろけ肉棒をくわえる準備がしっかりと整っていたのだから。

「じゅぷっ……んむむ……はあむ…んああむ……ちゅぱぁ……んんんっ…んぐ…んふぁぁ……んちゅうぅ……ちゅるっ……ちゅくっ……ぷちゃっ…ちゅぶぶっ…あおおぉん……んん……んぐ……ちゅぱあぁ…」

身を焦がす罪悪感をこらえながら、快楽に溺れていく人妻であった。

「そろそろ身体のほうも我慢できぬであろう？　ほれ、貫いてもらえ」

女王に操られている男たちが可南恵を囲む輪を狭めてくる。

「……」

男たちの目は虚ろで、ただ湧き上がってくる性欲のはけ口を求めて人妻のもとに群がってきている。無数の手が全身に這わせられ色々な場所をぶしつけに触ってくる。両側からチャイナ服の上からでも量感たっぷりの乳房をギュッと握り締められ、そのまま餅をこねるように揉みしだかれた。

「うんッ……ぁあ……ッ」

かなり強めに揉まれたというのに人妻の身体は反応してしまう。むしろ乱暴であるほど

自分の女としての被虐的な快感に火をつけてしまう。
（あぁ……イヤなのに……もう私、この快感に逆らえない……）
被虐の表情に頬を染める人妻封魔師。身体を襲う肉の悦楽に抗えない。どれだけ自分の心を強く持ったとしても、肉体をじっくりと開発され、堕とされてしまえばその感覚に溺れてしまう。悲しい女の性。
さらに調子に乗った両側の手指がそのまま円を描くかのような動きで乳房を揉み、時折生地の上に浮き出た乳首をピンと指先で弾く。ビクビクと反応してくる乳首を二指で摘み、くりくりっと摺り合わせる。
「ふぅんん……ッ……ぁぁあぉ……ッ」
全身から汗が湧き出てくる。身体をよじってもその刺激からは逃れられなかった。
チャイナ服の上からの刺激であっても、快感に身体が疼いているところへの刺激である。少し触られただけでも身体がビクッとする。ただでさえ敏感な乳首をしつこく責められてはたまらない。
（やめてぇ……これ以上……触らないで……ッ）
「どうやら直接触って欲しそうじゃな……」
しゅるるるるビリリッ！
「きゃあ……ッ！」
麗姫が指を引っ張るかのように動かすと、可南恵のチャイナドレスの左胸部分が弾け、

中からぷるんと白い果実のような乳肉がこぼれる。
（もう……聖気が尽きかかってる……っ！）
部分的とはいえ封魔師の鎧を突破され、危機感を感じる可南恵。自分の身体がもう快感に抵抗できないということは可南恵自身が一番よくわかっていた。
それどころか、肉体への快楽が可南恵の心までもを侵そうとしている。先刻も自分自身の衝動を抑えきれずに男を求めてしまった。もはや精神力も限界に近いのである。身体を守る聖気は精神力が尽きれば用を成さない。そうなれば自分は完全に淫魔の虜となってしまうだろう。
そんな可南恵の思考をさえぎるように露わになった豊乳をたっぷりと揉みしだく。太い男の指が乳房に食い込み、そこで震動を与えるようにぶるぶると震わせてくる。鈍い悦感が乳房から下半身に染み込んでくる。
「あふう……むぅぅんん……！」
言葉を許さないかのように別の男が可南恵の赤い唇を奪う。男臭い唇が口を割って入り、厚めの舌が口内に差し込まれる。
「んんん……ッ……」
ぴちゃっ……ぷちゃっ……ッ。
すぐに舌を探り当てられべろべろに舐め回される。舌を力強く唇で挟まれ、じゅるるっと吸われると頭が痺れ、じゅんっと股間を蜜で濡らしてしまう。

（あぁ……口の中は……ッ……敏感なのにぃ……ッッ！）

ぬるっとした舌が可南恵の口内を遠慮なしに舐め回す。口腔粘膜を性感帯に変えられた可南恵にとってはたまらない刺激であった。ぬめった舌が天井部の軟口蓋をじっくりと舐ってくると人妻の背中にぶるるッと鳥肌が立つ。しかし、「あの」部分だけは焦らすように避けて愛撫されるのがもどかしい。愛する夫の目の前で唇を奪われているのにもはや抵抗する気持ちすら薄れてきてしまっている。

さらに別の手は人妻のチャイナスカートの上からむっちりとした太腿をいやらしい手つきで撫でさする。その手を大きく丸い尻のほうに移動させると、白い生地の感触を楽しむように手の平でタッチしてくる。時折熟れた尻肉に指を食い込ませながら、スカートの中に潜り込ませてくる。

「ほほほっ……男たちに囲われてすっかり夢心地のようじゃな……」

ぐいっ。

全身への愛撫に心を乱されている可南恵の身体が、誰かに持ち上げられた。両手両足が押さえつけられていて力の抜けた身体では抵抗できない。

「へへ……俺はこっちをもらうぜ」

醜い淫魔の男が牢の床に寝転がって可南恵を腰の上にまたがせる。いわゆる騎乗位の体勢である。可南恵の腰を抱えて挿入しようと、その赤黒く凶悪な先端を決壊してドロドロの粘液をしたたらせる膣口に合わせた。

「オラッいただくぜ！」
ズブブブブッ！
「んあぁぁおお……ッ！」
（…ふ、深いィ……ッッ）
なんの前準備もなしに深く突き込まれる肉棒。ガクンッと背中が反り返り、執拗に吸われていた唇が離れる。熱い亀頭冠が爛れた秘粘膜をズブズブと掻き分け、一息に子宮まで届かせてくる。
「うへぇ……からみついてきやがるぜ……」
急激な挿入にもかかわらず、十分に淫汁を分泌していた秘壺は難なく巨根を受け止め、むしろそれを歓迎するかのようにうねうねと蠢き肉竿に腫れたような膣粘膜を貼りつかせてくる。
「あはあぁ……ッ…ああ……うんんッ……！」
はしたないよがり声が抑えられない。根元まで差し込んだペニスを今度はぐるんぐるんと回転させるようにして膣壁をこそぎ、そして今度はゆっくりと膣奥をいじめてくる。ビクビクと快感を欲しがっている子宮に亀頭をみっちりと埋め込み、密着したままズンズンと下から突き上げてくる。
「んん……ッ……はぁぁおお……ッッッ！」
（イヤッ……子宮を、子宮…を…そんな……突かないで……ッッ）

ずぶッずぶッずぶッ。
ズンッズンッという感覚が身体の中に広がっていく。子宮からの甘い痺れが全身に染み渡っていく。最奥をズンズン突かれるときの震動が可南恵の脳にまで響き、頭がボーっとなってしまう。快感に顔はとろけたような表情を浮かべ、唇を半開きにしたまま上下の揺れに身体を任せる。
「オラオラァ！　ここがイイんだろう？　もっと奥を突かれたいんだろうがよ」
そんな人妻の性感を徹底的に暴こうと執拗に膣奥ばかりを責めてくる。ペニスが根元まで挿入されるたびに可南恵の身体が仰け反り、鼓動が激しくなる。へその裏側が燃え上がるように熱く、切ないほどに疼く。亀頭が子宮口に嵌め込まれるとなんともいえない恍惚感が可南恵を包み込む。
（んぁぁぁッ……だめっ、このままじゃ……ッ！）
「ンンンあぁぁぁぁぁっぁあぁぁッッッッ!!」
ビクビクビクビクビクッ！
全身を仰け反らせ、人妻身体が絶頂の反応を見せる。頭を大きく後ろに反らしなまめかしい首筋を見せつける。身体がガクガクと震えて亀頭に絶頂の愛液を大量に噴きかける。
「はぁぁぁん……ぁぁんん……ッ」
浅い絶頂に達した恥ずかしさに淫魔にまたがったまま睫を伏せる。片方だけ露わになった乳房が荒い息に上下する。

「へへ……人妻の色っぽいアクメ顔はたまんねえぜ……」
激しく振り回されて乱れた髪が可南恵の快感に揺れる顔にかかり、甘い吐息の漏れる口元を飾った。そんな悩ましい光景が男たちの性欲に火をつける。
被虐の人妻に魔の手が次々と迫る。ゴツゴツした男の手がムニュっと素肌のバストを揉み立て、乳首にくりっと軽く爪を立ててくる。股間に這わされていた手が結合部の割れ目をツーっとなぞるように愛撫してくる。絶頂を迎えたばかりの敏感な肢体を撫で上げられ、狂乱する人妻封魔師。
ずぶぶぶぶぶ。
可南恵をアクメに引きずり込んだペニスがゆっくりと抜かれていく。張り出したくびれが膣壁を擦り上げ、可南恵の蜜をぐちゅぐちゅと掻き混ぜて、可南恵に色っぽい喘ぎ声を出させる。どろりと白く濁った恥蜜が膣内から太腿のほうにまで垂れていく。
そのまま抜くかと思われた肉棒は膣口のところまで先端を引き抜くと、今度はゆっくり挿入してくる。ゆっくり、ゆっくりと膣内の感触をたしかめるように秘肉にペニスを絡ませていく。
（あああぁ……ビンビンくるぅ……ッ）
一度オルガスムスに導かれた脳内は桃色に染まり、より深い快感を求めるように腰が勝手に動き出してしまう。
「はあぁぁんんっ……んおおぉ……んんむぅぅ…！」

唇をまたしても奪われた。今度はさっきよりも深い、ディープキス。今度は迎え入れるように口を大きく開けたままそれに応える。

ぬちゃぁ……。

ぬめぬめとした熱い舌が口内に押し入ってくる。第二の性器と化した口腔に男の生臭い舌が何度も突き込まれた。膣内の襞々を引き伸ばすペニスのような動きでぶちゃっぶちゃっと力強く粘膜を擦り上げる。快楽に惚けた可南恵は差し入れられた厚めの舌をれろれろと舐め、自分からその舌を吸い上げる。

「んちゅ……ぷちゅっ……ッ……じゅるる……ッ」

激しい水音とともに男と人妻の舌が絡み合う。男がどろりとした唾液を可南恵の舌に送り込むと人妻はそれをたっぷり味わうように咀嚼し、ごくりと喉を鳴らす。その生々しい味が胃に染み込んでお腹を熱くする。さらに、

れろぉっ……。

「んんんんん――――――――ッ!!」

可南恵の弱点、口内の天井部の「しこり」にねっとりと舌を使われ、可南恵の脳裏がスパークする。脳にジーンと直接響くようなエクスタシー。人妻封魔師は身体をガクガクと震わせその快感に酔った。

(んァァァァ……ッ……そこ…弱いの……ッ…あぁ……ッ…感じる…ッ…もっと……もっと舐めてェェェ……ッ!)

「んぁおぉ……ッ……じゅぷッ…ピチャッ……んんんぉぁぁ……ッ」

可南恵の心の声に応えるように口腔Gスポットを悪辣な舌遣いで責め立ててくる男。敏感な表面をざらついた舌の表側で何度も舐め上げ、可南恵の脳を狂わせたあと、舌裏のぬめった部分でにゅりゅっと包み込んでくるのだ。その甘い感覚に可南恵は何度も頭の中で火花を散らし腰を震わせその快美感を味わった。

（あォォォぁ……ッ……ああ駄目……ッ……またッ……許してェェ…ッ！）

――――ゾクゾクゾクッ。

獣のような視線を肌に感じながら何度も身体をビクつかせる人妻。しかし可南恵の疼く肉体にしてみるとほんの子供だましの絶頂である。

中途半端な絶頂は人妻の身体を余計に燃え立たせ、全身をとろ火で炙られるような切ない気持ちにさせる。より一層真のアクメへの期待を高まらせてしまうのだ。ビクッとするたびに弾けるように蜜を放出。そこから漂う甘酸っぱい発情した牝の匂いは、熟成した人妻そのものの色気を持って男たちを引き寄せる。

「ほほほっ……まるで牝犬じゃな。よほど快楽に飢えていたとみえる……」

イクたびに聖気がごっそりと奪い取られ、身体から力が抜けていく。これ以上されてはいけないのに、それなのに抵抗らしい抵抗もできずに次の絶頂へと導かれてしまう。しかしそれでも可南恵が望む本気の絶頂には足りなかった。異様な悦楽の渦が可南恵の身体の奥深くで切ないまでに蠢き、回避不能のアクメの中のアクメの予感が熟性器を駆け巡る。

（あぁ…いヤ……ッ…これ以上……されるとォォ…このままじゃ……クる……っ…大きいのが……きちゃうぅぅぅッ……ッ!!）

涅槃へと飛ばされる寸前の軽い絶頂でおあずけをされ、そのもどかしい快楽に酔いしれる人妻封魔師。淫欲の虜となった可南恵は自ら腰を上下に振り、目に愉悦の涙を浮かべながらも、膣内のペニスをさらに深く受け入れる。白いチャイナに包まれるむちむちした尻がそのたびにぷるんぷるんと揺れる。

「へへっ……そろそろ…キメるぜぇ」

じゅっぷじゅっぷじゅっぷ……。

男の腰遣いがより早急なものになる。

「奥さんの中にびっちりと出してやんねーとなぁ……」

「あん……ッ……んん……膣内（なか）は……やめてええええ……！」

快楽に流されかかっていた可南恵にも、妻である自分が妊娠してしまうという恐怖は頭をもたげてくる。こんな見ず知らずの男の子供を夫の目の前で孕まされるなんてことを想像するのもおぞましい。

「へへ……嘘はいけねぇな。奥さんのオマ〇コが欲しい、欲しいって言って俺のモノを締めつけてくるんだよ…きたなくて臭い液体でマ〇コの穴を汚されたい。夫の目の前で俺の熱くてどろどろの精液（ザーメン）が飲みたいってなぁ…！」

「そ……ッ……んあぁぁ……そんなことはぁぁぁ……ッ」

膣内射精の快感を思い出し、その感覚がぞわぞわっと背筋を昇ってくる。自分の家族の目前で妊娠するほどの精液を子宮に叩き込まれるその背徳感と愉悦。

「そうじゃ……おぬしの腹の中にネバネバとした男の精が絡みついて……女を中身からとろかすような熱さが全身に伝わって……気がおかしくなりそうなほどの悦楽に身を任せるのじゃ……」

（イヤぁ……！　言わないで……ッ……言わないでェェェ……ッ……!!）

麗姫の囁きが可南恵にピンク色の妄想を働かせ、ひくっひくっと子宮が疼いてしまう。夫の目の前で精液を欲してしまう淫らな自分に狂おしいほどの羞恥心を覚え、知らず知らずに叩きつけるように腰を使ってしまう。

「ほれ……欲しいんだろ？　……俺の精液が飲みてぇんだろ。身体の一番奥でよぉ」

ひくんッ……ひくんッ……。

男たちの動きが止まると、身体の奥が深いアクメを欲して震える。びゅっと熱湯のような蜜液を亀頭に浴びせかけ、爛れた膣粘膜が射精を求めるようにぎゅぅと絞り上げる。

（あ……だめ……私……ッ……身体が……欲しがってる……ッ）

ブルンブルンと胸を揺らし迎え腰を使う人妻。心が口が肉体の反応に逆らえない。

「……ください……ッ……おま〇この穴に射精してください……ッ……子宮（おく）に精液……たくさん注ぎ込んでくださいぃぃ……ッ」

屈服の言葉。軽い絶頂で炙られ、疼く人妻の肉は膣内射精の魔力に抗うことができなか

った。あの狂悦を味わうためならどんなことをしてもいいと思えるほどに。
数人の男が性欲を抑えられずに剥き出しの肉棒を可南恵に擦りつけてくる。押しつけられる熱い男のペニスに自ら白い指を絡め、何度もしごき立てる。
男の肉棒がピクピクと上下する。可南恵の身体が勝手に膣を締めつけて射精前のペニスをさらに強く刺激してしまう。
「オらぁ！　膣内射精しするぜぇぇ！」
聞くに堪えない恥音が可南恵の秘部から立ち、猛烈なピストンに掻き混ぜられた。
じゅぶっ…ぐちょッ…ぐちゅッ…じゅぼっ……じゅばッ…！
「お前の夫になにか言うことはねぇのかよ！　ほれ、他の男に抱かれて気をやるんだろ」
最も奥の部分を突き上げられ、
「はぅうぉぉぁぁッ……あなたぁ……ごめんなさいぃぃッ……私……わたしぃッ……あなた以外の男のかたで……ッ……イきますッ……――――あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
可南恵が腰を落とした瞬間、ズーンと一際大きく突き上げてくる。子宮と亀頭がこれ以上ないほど密着、ディープキスをする。それに合わせて乳首がちぎれるほど摘まれ、クリトリスもピンと弾かれる。口内のGスポットを散々に舐め回され、じゅるるっと強く吸われた。頭の中がピンクの閃光に包まれ、人妻の肉体が待望のアクメの快楽に震える。
「あああああああおおおおおおウッッ!!」
ビュルルルルルルルル!!

待ちに待った心を飛ばすほどの絶頂感に身体を仰け反らせようとしたその瞬間、密着した亀頭から大量の熱い精液がほとばしり、子宮に直接浴びせかけられる。ぴったりと嵌った亀頭がズーンと子宮口を突き上げながら子種を送り込んでくる衝撃。身体の奥がとろけてしまいそうな快美感。可南恵の腰が抜け、身体が反ったまま抑えがきかない。

それと同時に両手内のペニスがビクビクと震え大量の白濁液をチャイナドレスに吐きかける。葛湯のような濃厚な精液が人妻の絶頂の最中の肉体にほとばしる。むせるほどの生々しい男の匂いの白濁液が全身に染み込んでいくような感覚に人妻は狂乱する。

「イクッ――――――――――――――――!!」

ブルブルブルブルブルブルッ。

これ以上ないほどに強く、ブリッジをするかのように背中を仰け反らせる。口が開いたまま閉じることができない。甘い激震が身体の中をすごい勢いで駆け巡り、身体がイく状態のまま戻ってこれない。何度も何度も腰を激しく震わせる。どれだけ叫んでも、どれだけ身体を震わせても身体の奥に巣くった狂悦が消えてくれない。子宮で無限大に生まれ続けるアクメが、可南恵を何度も何度もイカせる。決して終わらない悦楽の輪廻。

精液にまみれたチャイナドレスに包まれた肉体を何度も引きつらせ、自分から抜け出ていく聖気の奔流に身を任せる。

「――いくッ――――オマ〇コイくぅぅぅぅぅぅ!!」

（とける…ぅ……ッ……私の身体……とけちゃう……ッッ！）

「いくッ！」
可南恵の頭を吹き飛ばすほどのアクメ。イクと言うたびにどこかへイかされる。
心の底で望んでいた狂おしい絶頂に可南恵は下品な言葉を叫びながら意識を飛ばされた。

意識を失っていたのは一瞬だったのか長時間だったのかわからない。しかしそれがどうでもよく思えるほど、陵辱は続いていた。可南恵の身体も心ももはや限界に達し、堕ちるのも時間の問題であった。
「ふっ……面白いモノが見れるぞ。あちらを向いてみよ」
朦朧とする可南恵が麗姫の言葉に反応し、指差された方向を見る。
「ようやっときよったか……遅かったではないか」
「フォッフォッフォ……中々こやつの具合がよくてな。こやつも儂のものが気に入ったのか離れようとせぬわ」
（……っ!!）
驚きのあまり正気を取り戻す可南恵。それは蛙の姿をした小太りの中年男に抱えられる姪の奈緒の姿だった。抱えられるとはいっても、奈緒のチャイナスカートはめくり上げられ、露わになった秘唇と中年の男性器が密着した状態で、前から抱っこされるような格好。いわゆる「駅弁」と呼ばれるような体位のままで運ばれてきたのだ。
（……！　蝦蟇王バルバス……っッ！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/